

# 非エリート の勝負学

マッコイ  
齊藤

## まえがき

俺は山形県の小さな村で生まれた田舎者だ。

学歴、財力、コネ、家柄、出身地……。

この世には、努力だけでは超えられない格差がある。

しかし一方でそんな格差が通用しない、誰に対しても平等な場所がある。

お笑いの世界である。

お笑いの世界は、高卒だろうが、貧乏人だろうが、数字と結果さえ出せば、誰でも勝ち上がることができる特殊な場所だ。

お金もコネも飛び抜けた身体能力もない、田舎者の俺にはびったりだと思った。この世界で生きていこう。

そう覚悟を決めてから約30年間、俺は野武士のようにかっこ悪く、人間臭く、未熟なやり方で、あらゆる圧力に耐えながら「数字と結果」というものをつかみ取ってきた。

そんな俺が通ってきた平坦ではない道のりと、

お笑いの世界の先輩たちから叩き込まれ、心に刻みつけてきた仕事の考え方を、これから伝えようと思う。

もしあなたが本当は笑った人間なのに、

いつの間にか「丸くなってる」のだとしたら、

この本が反骨心を思い出すきっかけになるかもしれない。

とにかく「面白い」だけが正義。

俺はそんな自分のシンプルな信念に従って生きてきた。

あなたはどうかだろう？

俺は、自分の欲求に従って行動できる人間を、

「一匹の動物」としてリスペクトする。

たとえ誰かに嫌われようが、反対されようが、怒られようが、  
あなたも自分の人生を好き勝手にできますように。

一人の演出家として祈っています。

## 1部

# 始動

俺は行きたいところへ行く。

6

お笑いドリーム／チャンス／

そういうことじゃない／師匠と呼べる人

## 2部

# 発進

俺はもう一度、あそこへ戻る。

74

無職と迷走／情報番組／加藤浩次／

深夜のカリスマ／大波小波

2

3部

# 加速

俺はもつと上をめざす。

萎縮／ゴールデンの壁／ジャンプアップ

144

4部

# 疾走

俺はこれで生きていく。

最高のキャプテンシー／1行で語れるか／笑軍

202

あとがき

264



1部

始動

俺は行きたいところへ行く。



# 1部 —— 始動

人を笑わせるのが気持ちよかった。  
その瞬間が最高だった。

ばあちゃんは言う。

「笑う門には福来たる」

「誠、笑いなさい」

「つらいときでも笑えばなんとかなるから」

本当にそうなんだろうか。

俺は笑いで日本一になりたい。



ここはなにもない田舎だし、

俺には、スポーツ選手になれる才能も

商売で稼ぐアタマの良さもない。

でも東京に出て、

お笑いの世界に飛び込めば、

もしかしたらなにかが起ころのだろうか。

俺は自分の力を確かめてみたかった。

# お笑いドリーム

## たけしさんへの憧れ

俺は山形県の最上郡、鮭川村牛潜うしくくりで生まれた。

村の人口は3800人くらい。通っていた牛潜小学校の全校生徒は32人。

田んぼに囲まれた実家から、隣の友達の家まで500メートル。とにかくだだっ広い。人はいない。なんの事件も起きない場所だった。

家業は農業で、田んぼは東京ドーム1個分あり、父ちゃん母ちゃんが元気に米を作ってる。お金持ちではなかったが、ひもじい思いをしたことはない。ばあちゃんじいちゃんも孫の俺に優しかった。これといった問題はない。

だけど、なんか足らねえ……。

# 1部——始動

小さな欲求不満は、中学、高校と日増しに溜まっていき、やがてことあるごとに不良の字もない優等生の兄貴と比べられ、周囲から「お兄ちゃんはできるのに」としつこく言われることに苛つくようになって、悪さばかりするようになった。

タバコを吸いながらスクーターで田舎のあぜ道を突っ走る。街でケンカをする。後輩からカンパと称してお金を巻き上げる。先生に怒られる。いわゆるヤンキー。ただのヤンキー。当時はツツパリ漫画『ビー・バップ・ハイスクール』全盛期だったのだ。

その結果、高校卒業の3ヵ月前になると、いろいろやりすぎてなにをやったか覚えてすらいなかったが、校長室に呼び出され「今度という今度は退学だ」と告げられる。

短ランにボンタン姿で不貞腐れている俺。その横でずっと涙ぐむ母ちゃん。

苦い沈黙の中、母ちゃんはとうとう「なんとか誠を卒業させてください」と土下座をしてしまう。

「斉藤！ お母さんがこれだけ泣いているのに、おまえはなんとも思わないのか！」  
いいや。思うよ。つくづく。

頭を下げて小さくなっている母ちゃんの背中を見て、俺は心底「母ちゃんをこれ以上、泣かせられないな」と思った。

だけど、農業は嫌いだった。

通っていたのは山形県立新庄農業高等学校（現・山形県立新庄神室産業高等学校）という立派な農業高校だが、実家で田んぼをやる気は皆無だった。

またそれ以上に、地元の雰囲気もやる気がなかった。卒業した後どうするかと言えば、なんとなく進路を決めていく。農家の子は農業。ヤンキーはガススタか土建業。優等生は公務員。その他大勢は、定食屋の見習いか地元の会社に散っていく。

俺には地元でやりたいことを見つけれず、かといって、飛び抜けて勉強や、スポーツができるわけでもない。このままいけば、ガススタの従業員か定食屋の見習いになるだろう。

それが嫌で、かといってコネや特別な才能があるわけでもなく、ただくすぶり続けている。

だが、希望の光がまったくなかったわけではない。

俺には「お笑い」という強い憧れがあった。

きっかけは、俺が小学生だった頃。NHK以外に映る民放が3つしかない山形でも放映

# 1部——始動

されていた『花王名人劇場』という番組である。

世の中は漫才ブームだったなかで、その先頭を突っ走っていたのがツービートだった。初めて彼らの漫才を見たとき、俺は呆然としてしまった。

「気をつけよう、ブスが痴漢を待っている」

「やればできると、言われ続けて80年」

「赤信号みんなで渡れば怖くない」

「無免許運転 10年やっ तरीやうまくなる」

「クルマが来たら飛び込んで みんなでもらおう 自動車保険」

なんてかっこいいんだ。

ボケのビートたけしさんが次々と放つ乱暴な言葉たちに、俺は腹を抱えて大笑いしながらも、すっかり心を奪われてしまったのだ。

完全に夢中だった。とにかくたけしさんのことが好きになった。好きで、好きで、たけしさんの出ている番組は『THE MANZAI』『オレたちひょうきん族』『スーパ-

ジョッキー』『ビートたけしのオールナイトニッポン』……すべてチェックし、「将来はたけし軍団に入る！」という夢まで周囲に語りはじめた。

おまけに、たけしさんのように人を一瞬で笑わせられるような人間になりたくて、友達と一発ギャグを研究するグループも作ったほどだ。休み時間、廊下に集まっては、お互い一発ギャグを披露し合い、そのギャグが面白いか、面白くないかを話し合う。面白くないければ、どうすれば面白くなるかを話し合う。この習慣を小中高と、教室、校舎裏、スパーの駐車場、あらゆる場所で飽きることなくほぼ毎日続けた。

俺にとってはどんな遊びよりも、「人を笑わせること」に勝る刺激はなかった。爆笑する友達の顔を見ることは格別の喜びだった。

俺はお笑いの虜になっていた。

## 田舎にいてどうすんの

根っからのお笑い好きという性格は、ばあちゃんからの影響が大きいかもしれない。村の人気者で、料理が上手で、人が集まる場が大好き。その輪の中で人一倍笑っている

# 1部——始動

ばあちゃんは、とにかく周囲を楽しませるのが好きな人だった。

家のトイレの壁には、農協の日めくりカレンダーが貼ってあった。ばあちゃんはそのカレンダーの空白に毎日こう書き込んでいた。

「笑う門には福来たる」

そんなばあちゃんが、いつも失敗だらけの俺にずっと言い続けてくれたのが、

「誠、笑いなさい」「つらいときでも笑えばなんとかなるから」  
という言葉葉だった。

俺は東京に行こうと決めていた。

農業はやりたくないし、地元のどこかに勤める自分も想像できなかったが、笑いなら一旗揚げられるかもしれない、というそんな根拠のない自信があったからだ。

人を笑わせる気持ちよさ。

人に笑わせてもらう気持ちよさ。

どっちの気持ちよさも、俺は人一倍知っているつもりだった。

また、ビートきよしさんの存在も大きかった。

ツービートのツツコミであるビートきよしさんは、当時、有名人などほぼ輩出していなかった山形県、しかも最上郡出身ながら唯一、芸能界で活躍していた人だ。

「山形県最上郡最上町」の人が、あのビートたけしさんと漫才をしている。

そのすごさを奇跡のように感じる一方、地元に戻ってきたきよしさんを駅前なんかで見かけると「俺もなれっかな」と勝手に希望をもらった。

同郷のきよしさんが成功しているなら、俺だって東京で「笑い」の仕事ができるかもしれない。

そして、たけしさんのために何かをやれるかもしれない。

だが俺が「上京する」と言ったとき、周りの大人たちは冷ややかに笑った。

「ムリムリ」「行っても、なにもできやしない」「いつまでも尖ってないで、ご実家の農業を継ぎなさい」「あとで社会の厳しさを思い知るから」

たしかにそれが現実かもしれない。



# 1部——始動

でももし、それが現実だったとしてもよ。  
ずっと田舎にいて、どうすんのよ？

バカにされる悔しさと、先行きの見えない不安。  
その間でぐらつく俺の背中を押してくれたのが、ばあちゃんの言葉だった。

「誠、笑いなさい」

「つらいときでも笑えばなんとかなるから」

「笑う門には福来たる、だよ」

東京っていうのは、存在がでかすぎてよくわかんねえ。  
わからなすぎる。  
でも笑ってれば、なんとかやっていけるだろ。

いや、ふざけんな、やってやるよ。

# チャンス

たけしさんに1ミリも近づけない

ビートたけしさんのために何かしたい。

そのために、芸能界に関わる仕事をしたい。

自分では完全にそう決めていたが、その決心を家族に伝えることはできなかった。

田舎の人間からすれば、芸能界はあまりにも遠い。

その世界で成功する可能性なんて信じようもない。

ただでさえ、農業高校を卒業させてもらったのに「農業は死んでもやりたくない」と言っている親不孝な息子だ。

反対されるのは目に見えていた。

# 1部——始動

だから俺は両親にこう言った。

「東京の中華料理屋で修業してコックになる」

その中華料理屋はうちの家族の知り合いの店だった。

目的もなく東京に行くのはダメだと言いつづけていた両親も、具体的な目的がある以上、俺の上京を許す以外なかったようだ。

高校を卒業したばかりの俺は東京へ行き、文京区にある知り合いの中華料理屋でバイト生活をはじめた。

夜になれば繁華街に出かけ、『笑っていいとも!』のスタジオがある新宿アルタ前をうろついては、「芸能」を近くに感じワクワクした。あるときはジミー大西を見かけた。ピートキよし師匠に続く二人目、東京で見た初めての「本物の芸能人」だった。

憧れの番組を作っているテレビ局は、今俺が立っているのと同じ東京にある。そう思うだけで妄想が止まらなかった。

中華料理屋であくせく働き、仕事が終わったら夜の繁華街で夢を思い描く毎日。

それも悪くなかった。が、1、2ヵ月も経つと思つた。

こんなんじゃ、たけしさんに1ミリも近づかねえな。

元々中華料理が好きなわけでも、調理師になりたいわけでもない。

「石の上にも三年」とは、本腰入れた修業期間だからこそ納得できる言葉だ。  
やりたくない仕事を続けていれば、普通に嫌になってくる。  
でっちあげの目的じゃ踏ん張りは利かない。

あー、もうさっさと辞めてえ。

テレビの世界にちよつとでも接近してえ。

とはいえ、山形の農業高校を出たばっかで右も左もわからないし、スマホで調べればなんでもわかる時代じゃない。

一体どこに行ったら、たけしさんに会えるんだろう。

もやもやを抱えたまま、俺はラーメン鉢を洗い続けていた。

## くるくるの履歴書

転機がやってきたのは、友達と横浜元町へ遊びに行ったときのこと。

ふらっと入ったコンビニで、『De☆View』という雑誌をなんと手にとった。「芸能界の本だから」である。

ところが、なんのめぐり合せだろう。

パラパラとめくっていると、

“『天才・たけしの元気が出るテレビ!!』スタッフ募集”

という文字が目飛び込んできたのだ。

ウソだろ？

即、電話ボックスから問い合わせ。そしてすぐ『天才・たけしの元気が出るテレビ!!』の制作会社、IVSテレビ制作の面接を受けられることになった。

あれだけ探して見つからなかったのに、こんなところにチャンスがあったのかよ。

ありえない幸運だった。

ようやく俺の「笑いに対する熱量」をぶつけられる。

上京から約1年かかったが、たけしさんに少しかだけ近づけたような気がした。興奮した勢いで、中華料理屋のバイトも辞めた。

今でもはつきりと覚えている。

面接会場は、JRの市ヶ谷駅から日本テレビ（当時）に向かう上り坂の左側にあった第8田中ビルの4階。意気揚々とエレベーターに乗ったが、エレベーターを降りたとたん、俺は自分がやらかしたことに気がついた。

どこを見てもみんなスーツにネクタイ、真面目でさわやかな髪型をしている。

破れたデニムに革のブーツ、ライダーズにファアのマフラー、金髪坊主なのは俺だけだった。

手ぶらで履歴書1枚を握りしめている俺と、誰も目を合わせようもしない。

これは、なかつたか……。

とりあえず係員から指示されたとおり控え室で座って待っていると、奥の部屋から面接のやりとりが聞こえてくる。

「明治です」「慶應です」「早稲田です」。またしばらくすると「明治です」「慶應です」「早稲田です」。

……高卒、俺だけかよ。

これはさすがにねえな。

さっさとあきらめて帰ろうとすると、「はい次、斉藤さん」と呼ばれたので仕方なく面接室に入り、無言で面接官に履歷書を手渡した。

履歷書は筒状に丸まったまま。

無意識のうちに履歷書をくるくる巻いて、バトンみたいにして握りしめていたからだ。

くるくるになつてゐるから、デスクに置けばペロンペロンめくり上がってくる。面接官はそれを手の平で何度も押さえながら言った。

「どうして丸めちゃつたの？　これで受かると思つてゐるの？」

俺は鋭い目でこちらを見る面接官をにらみ返し、

「ああ、もう全然思つてないです」

と言つて坊主頭を搔いた。

「じゃあ、なにしに來たの？」

「なにしに來たっていうか、自分こんな格好ですし、みんな大卒みたいですし、スーツ着ているし。もう見た目の時点で、こりゃねえなって思っちゃいました」

「うん、そうだろうね」

「はい、すいません」

完全にアウトな流れの中、もう一人の面接官が「そもそも、なんでうちの面接を受けようと思ったの？」と質問してきた。

どうせ落ちるんだ。正直、話すのも馬鹿らしいと思った。だが、面接会場に張られていた『天才・たけしの元気が出るテレビ!!』というポスターを見たら、急に気持ちがあふれてきた。

俺は、小学生のときに初めて花王名人劇場でたけしさんを見て以来、どれだけたけしさんのことが好きだったか、どれだけ心を救われてきたか、どれだけ憧れてきたか、面接官のことなんてまったく知りもしないのに、おまえなんかにわかってたまるかよとまるで怒りをぶつけるような気持ちで伝えた。

短い時間だったが、想いを伝えられてすっきりした。そのまま面接会場を出て、市ヶ谷駅に戻る坂を下りはじめたときにはもう、次の仕事はどうしようかと考えていた。



# 1部——始動

それから何日か経ち、俺は埼玉県川口市のアパートで出かける準備をしていた。

探偵になって人を尾行するのもいいか。観光の仕事で京都や沖縄に行けるのもいいか。悩んだ挙げ句に、どっちにも履歴書を送ってみて、どっちからも連絡はきていなかった。

中華料理屋はもう辞めているから金がない。とにかく日銭がないとまずいから「山田うどん」といううどんチェーン店のバイト面接に行こうとしていた、そんな昼過ぎのことだ。

パナソニックの黒い電話が鳴り、受話器を取るなり「斉藤さん？」と聞かれた。

電話の相手はIVSテレビ制作の人間だと名乗り、「明日から来られますかね」と言う。

「どういうことですか」

「明日からうちで働けますか、ということですが」

俺は思わず舌打ちをしそうになった。

「え、いや、俺ですよ。電話するところ、間違えてますよね」

すると受話器の向こうの人はフフフと笑った。

「間違っていないよ。履歴書がくるくるだった斉藤さんでしょ？」

俺は受話器を落としかけた。

俺が採用？ 『天才・たけしの元気が出るテレビ!!』のスタッフに？  
「明日から来られますかね」

信じられなかった。

明日にはもう、憧れのビートたけしさんに会えてしまうのだろうか。